
夕焼け色の世界

春後秋前

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕焼け色の世界

【Nコード】

N1928I

【作者名】

春後秋前

【あらすじ】

今より先の崩壊した世界。
そこで暮らす一人の少女
そして記憶喪失の娘

夕焼けに空が輝いていた時の事だった。

少女

夕焼けに空が輝いていた時の事だった。

少女は目を覚ました。

紅い夕焼け色の瞳にブラウンのセミロングの髪をしていた。一瞬、頭を抱えてうずくまろうとしたがすぐに回りを見始めた。周りは、廃墟と化したビル、倒れかけいる家。まるで数億年後の世界だ、と少女は考えた。

そのとき。

「嗚呼、まだ人間が生きていたのか」

「！？」

突然声がした。少女が振り返ると黒目で黒いロング髪の少女が立っていた。

その少女は、そこらへんにあったコンクリートを両手で持ち上げて軽く土をはらった。それを二つおく。そして、凜とした声で言った。

「座りなよ。土の上に座ってたら汚いから」

「あ、ありがとう……」

「へえ、意外といい暮らし出来たんだな。運良く食料庫の近くとかそんなのだったんだろ」

少女は訳の分からないことを言った。ブラウン髪の少女は、驚いたまま動けない。

紅い唇をその少女は動かしてほほ笑んだ。

そして今度は低く、それでも響く声でブラウン髪の少女に言った。

「名前は？」

「えつと、……… 忘れた」

「……、冗談でしょ？ 私^{せつな}は刹那」

刹那という少女はブラウン髪の少女に笑いかけた。

しかし少女は怯えた目で刹那をみるだけだった。

ギヂギヂと立ててある棒が悲鳴をあげる。上から国旗であろうものが落ちてきた。

「に、日本の旗……」

少女は震えた。振ってきたのは白い布に赤い丸。

そう、真正銘日本の国旗だ。

刹那は少し戸惑ってから、また響く声で言った。

「ここは、日本だ」

「え……、何年!？」

「3000年、くらいかな。ああ、まだ2500年なのかな。よく分からないよ。こうなったのが私が7歳くらいだったから、年代とか気にしてなかった」

刹那は遠くを見るように空を見上げた。少女は口を押さえたまま硬直した。

少女の記憶はバラバラになっていたのだ。

最後の記憶だけは焼きついている。自分が叔父さんと呼ぶある人についていった。それだけだった。

そついうことを刹那に伝える少女。

「ああ、記憶喪失だね。仕方ないな。ま、あれはショックだもんね。私も一時期 自暴自棄に走ったもん」

「何があつたの……?」

「ん、世界の連中が戦争をくりだそうとして、同時に爆発が起った。そして突然 大陸が崩れ始め、世界は当然崩壊したんだ。本当突然だった。

隕石が降りまくってきて、酸性雨ポロポロ。それからね、予測不能な地震や台風だな」

「怖い……ね」

少女は軽く震えた。

刹那は優しくほほ笑んだ後、ゆっくり話し始めた。低く、思い出しながら冷静に。

「そして、私が7歳の頃 町の大きな食料庫に配給を取りに行った。親がもう逃げてついったんだ。

逃げるところなんてないのに。それで一人で行って、入ったとたん」

「……途端？」

「揺れた。ズシって。一瞬で意識が飛んで、びっくりしたよ。夕焼けに空が輝いていた時の事だった。気がついたら食料庫のなかに一人であおれていて。皆 ほぼ亡くなっていた」

「……」

「皆 平和なところに逃げようとしたけど、私は食物庫で一人暮らし始めた。そして3年前についにつきちゃってね。自分で暮らし始めたんだ」

少女は、自分より大人びてみえる刹那をマジマジと見つめた。

ツツク

闇夜

「ああ、行く所ないよな」

刹那が突然立ち上がり、少女は困惑した表情で刹那をみた。短い沈黙の後、刹那は黙って座った。少女は途端に刹那から目を逸らした。

刹那の目は、輝くように少女を見ていた。

「名前、忘れたままだよな」

「う、うん」

「なんて名前がいい？呼びにくいしき、適当につけよう」
刹那が笑った。

そのとき、少女の頭の中で映像が流れた。

顔がよく判らない。人間に少女は笑いかけられていた。

そしてその人間は少女に向かって

「夕歌^{ゆか}、おきなさい」

と言った。

記憶だろうか。少女は頭を抑えた。

刹那が心底申し訳なさそうな顔をした。記憶喪失のこの子にひどいことでも言っただと勘違いしているようだ。少女は笑った。

「夕歌。夕日の夕に歌って書いてユカ。どう？」

「まあ、いい名前じゃないか。どこで思いついたんだ？ 夕歌」

「記憶……なのかな」

「え？」

「うっん、なんでもない」

夕歌はつい誤魔化してしまう。

刹那は、少し微笑んだ後立ち上がった。

黒髪が舞って、綺麗としか言いようがなかった。夕歌は赤面して刹那を見つめた。

刹那の方は、ゆっくり泥を払うようにしてから夕歌の方を向く。視線がバッチリあってしまう。

「おいおい、私は男じゃないんだよ？ そんなまぶしい目でみないでよね」

「綺麗、だね。……刹那、さん」

「刹那でいいって」

刹那は歩き出す。夕歌も歩き出そうとした。

しかし、止まる。

空が紅色に染まったままだ。それほど時間はたっていないのだろう。しかし、夕歌はずっと空を見ていた。

「夕歌？ あれ」

刹那が振り返ると、夕歌はいなかった。おいてきてしまったのだ。

刹那は黙って後ろを睨んだ。

そして、さっきの場所へ走り出した。

「刹那？」

夕歌がハッとすると刹那がいなかった。夕歌は、おびえてうずくまりかけた。

帰りたい！と心の底から叫ぶ。

と、夕歌は考えた。

「どこへ……」

もしかして私は、この国の住人じゃないのかも知れない。と夕歌は思った。

記憶の断片は、裕福な姿ばかり。私が幼き頃にあの悲劇が起きたとしたら、あの記憶は……と夕歌は考え続ける。

あの記憶は私も10歳は過ぎていたはず、なんでだろう？ 他の

国は実は平気だったとか、他の世界があったとか？ でも、私は日本人……と夕歌の考えはしっかりと組み立てられていく。

でも、私は日本人だ、ここは日本だね……とそのとき。

「夕歌！」

「刹那！」

「よかった、行きましょう」

刹那が現れた。彼女を凝視してから、夕歌はココロの中でつぶやいた。

……ここは日本じゃないの？ そうしたら、刹那は？

急に背筋が凍えてきた。

ツツク

闇夜（2）（前書き）

これは、ファンタジーです……。

急展開を見せちゃった夕焼け色の空。

そして、夕歌は。

闇夜（2）

ガクガクと足が震えてきた。

「夕歌？」

「刹那、ココは日本じゃないかもしれない。私……」

夕歌は全て話した。

刹那の顔が微妙に歪む。夕歌は恐ろしくなった。

急に目の前の人間が怖くなったのだった。

「夕歌、そう。そうか」

「せ、刹那……」

「もう少し、長生きさせてあげたかったんだけど、気づかれたらおしまいね。お馬鹿さん、気づいてないフリくらいできたでしょうに」

刹那は今までと変わった顔をする。

こわくなった。急にこわくなったのだ。

夕歌はその場を逃げ出した。しかし、逃げれないと判っていた。わかっていて、逃げた。人間の本能か。夕歌のココロは死にたくないとした喚き、体はもう走れない、逃げれないと悲鳴をあげる。

夕歌の汗が飛び散って、目に入る。

刹那はただ追いかけてくる。

「こないでっ！」

「逃げても無駄よ！」

「嫌っ……」

夕歌の頭が揺れる。

記憶が 少しずつ返ってくる。

ザザザと流れる記憶は走馬灯のようだ。

「何なの……ここはっ！」

夕歌は記憶を辿った。

しかし、記憶は母らしき人が泣いてる記憶しかわからない。

「何なのよっ！ 私が何をしたって言うの！？」

夕歌はトンネルのようなところに逃げ込んで隠れた。刹那は気づかず去っていく。

何なのだ。何なのだ。私が何をしたというのか。

夕歌は頭をしっかりと抑えて考えた。

「夕歌」

凜とした声が頭に響く。

「だれ！？ あっ」

刹那にばれた。逃げていく夕歌。

「夕歌、かえっておいで」

頭の中で響く声。

何がなんだかわからなくなった。

ただ、刹那に右腕を掴まれ、グイと引き寄せられて刹那の持っていたナイフに首が近づいたのがわかった。無我夢中で刹那を突き飛ばし、周りの音さえ聞こえないくらい走った。

それでも刹那はナイフを投げてきた。夕歌は転んで頭を打った。

刹那は乗りかかって来てナイフを振りかざした。

「飛鳥！^{アスカ}」

夕歌は叫んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1928i/>

夕焼け色の世界

2011年5月10日19時25分発行